

かつて日本人男性のがん死亡者数のトップを占めた胃がん。肺がんが増加したため、1990年代に2位になったが、発症者数では依然として最も多い。その胃がんの主な原因がヘリコバクター・ピロリ（ピ

ロリ菌）の感染だったことが判明。日本人は中高年の感染者が多く、60代以降は8割以上が感染しているとされる。しかし、胃の除菌により、ピロリ菌感染を原因とする胃がんの予防が可能になってきた。

ピロリ菌除菌 胃がん予防

発症者の95%が感染

若い世代大きな効果

「胃がん撲滅計画」を提唱しているのは北海道大医学部の浅香正博教授（がん予防内科）だ。

「胃がんの原因は、日本は95%以上がピロリ菌感染というデータが昨年発表された。つまり胃がんはほとんどピロリ菌が原因と確認されたということ」と浅香教授は指摘する。

国は対策置き去り

「肝臓がんと子宮頸がんは国の感染症対策が取られているが、胃がんは何もされていない。40年にわたって年間5万人も亡くなっているのに、このままでは高齢化も進むので死亡者数は減らない。除菌で予防できる可能性が高いのだから、国は対策に乗り出すべきだ」

現在、ピロリ菌除菌に保険が利くのは、胃潰瘍や十二指腸潰瘍など限られた疾患だけだ。

慢性胃炎から発展

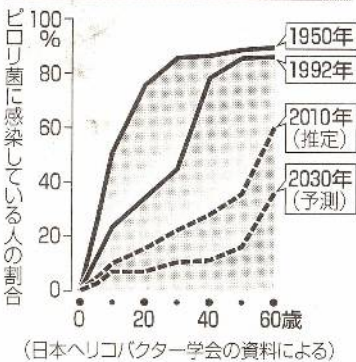
今年6月に閣議決定された新しい「がん対策推進基本計画」には「胃がんと関連するヘリコバクター・ピロリ」という文言が初めて挿入され、「除菌の有用性について内外の知見をもとに検討する」という文言も入り、ピロリ菌対策重視の政策が期待できるようになった。

「ピロリ菌に感染すると、数週間から数カ月で100%慢性胃炎が起きることが分かっていた。この胃炎はピロリ菌感染胃炎ともいわれ、胃潰瘍、萎縮性胃炎や胃がんなど、胃の病気の多くを引き起こすことが分かっていた。この慢性胃炎さえ防げれば、胃がんのほかにいくつもの病気を抑制できる」

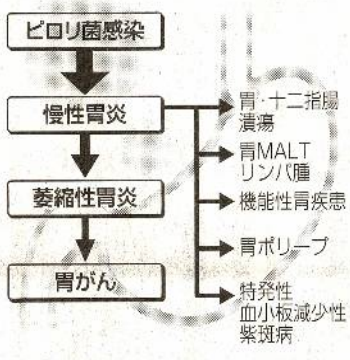


「除菌療法を受け早ければ早いほどいい」と話す浅香教授

日本人のピロリ菌感染率の過去と将来予測



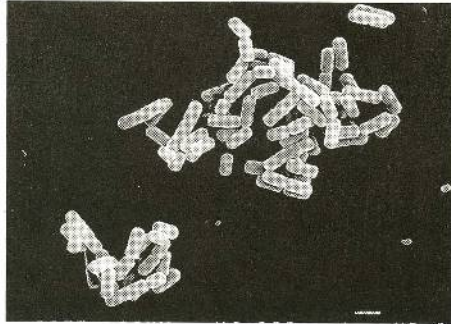
ピロリ菌感染で起こるさまざまな疾患



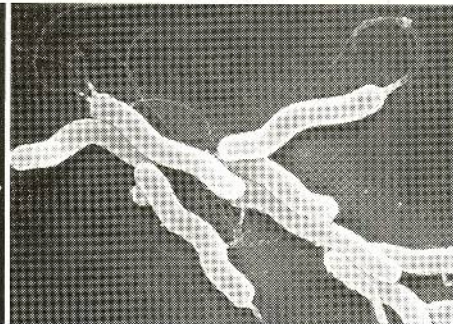
浅香教授は「若い世代で早めに除菌できれば100%胃がんを抑制できる。50代では男性で約7割、女性で9割抑制するが、60代では男性は半分ほどになる。従って、除菌療法を受けるのは早ければ早いほどいい。50代以上では除菌だけでは胃がんの発生を予防することが難しいので、除菌後も定期的な検診が必要だ」ということを強調しておきたい」と話している。

3

LG21



ピロリ菌



(東海大医学部・古賀泰裕教授提供)

抗菌薬を効きやすく 乳酸菌LG21

現在、ピロリ菌の除菌に 指摘する。

使われているのは、胃酸の分泌を抑える薬と二つの抗菌薬の計3薬で、これを1週間続けて服用する。

「問題は、除菌に使われる抗菌薬の一つ、クラリスロマイシンに耐性があるピロリ菌が3割くらいいること。その分、除菌率が落ちる」と東海大医学部の高木敦司教授(総合内科学)は

「問題は、除菌に使われる抗菌薬の一つ、クラリスロマイシンに耐性があるピロリ菌が3割くらいいること。その分、除菌率が落ちる」と東海大医学部の高木敦司教授(総合内科学)は

「問題は、除菌に使われる抗菌薬の一つ、クラリスロマイシンに耐性があるピロリ菌が3割くらいいること。その分、除菌率が落ちる」と東海大医学部の高木敦司教授(総合内科学)は

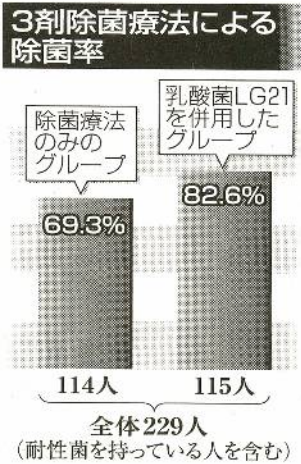
「問題は、除菌に使われる抗菌薬の一つ、クラリスロマイシンに耐性があるピロリ菌が3割くらいいること。その分、除菌率が落ちる」と東海大医学部の高木敦司教授(総合内科学)は

「問題は、除菌に使われる抗菌薬の一つ、クラリスロマイシンに耐性があるピロリ菌が3割くらいいること。その分、除菌率が落ちる」と東海大医学部の高木敦司教授(総合内科学)は

「問題は、除菌に使われる抗菌薬の一つ、クラリスロマイシンに耐性があるピロリ菌が3割くらいいること。その分、除菌率が落ちる」と東海大医学部の高木敦司教授(総合内科学)は

「問題は、除菌に使われる抗菌薬の一つ、クラリスロマイシンに耐性があるピロリ菌が3割くらいいること。その分、除菌率が落ちる」と東海大医学部の高木敦司教授(総合内科学)は

「問題は、除菌に使われる抗菌薬の一つ、クラリスロマイシンに耐性があるピロリ菌が3割くらいいること。その分、除菌率が落ちる」と東海大医学部の高木敦司教授(総合内科学)は



高木教授

は除菌まではいかない。

高木教授は東京薬科大との共同研究で、229人を対象に、除菌の際にLG21ヨーグルトを併用する効果を調べてみた。

LG21を併用する場合、1日2個を除菌前3週間と除菌中の1週間の計4週間食べてもらった。全体を無作為に2群に分けて比べた結果、LG21を食べないグループの除菌率は69・3%だったが、食べたグループは82・6%と明らかに除菌率が上がった。このうち、耐性菌を持つ51人の比較では、除菌率は

クリック

LG21の発見経緯 ピロリ菌が発見された後、日本では、ピロリ菌の働きを調べるモデル動物を開発しようと、マウスにピロリ菌を大量に飲ませたが、胃に定着(感染)しなかった。ところが完全に無菌のマウスの胃にはピロリ菌が感染することに東海大医学部の古賀泰裕教授(感染症学)が気付き、詳しく調べたところ、感染しないマウスの胃の中には乳酸菌がいるためと判明した。さらに、感染した無菌マウスに乳酸菌を与えると、ピロリ菌が排除されることが分かり、乳酸菌の有用性が確認された。より効果のある乳酸菌の菌株を探した結果、LG21が見つかった。

LG21を食べないグループは28・0%と低かったが、LG21を食べたグループは38・5%と、やや高めだった。人数が少なかったため統計的差は出なかったという。耐性菌でない137人では、LG21なしのグループが85・6%に対し、LG21を摂取したグループは92・8%と、除菌率は双方とも高かった。高木教授は「LG21の摂取で全体として除菌率が上がった。摂取により、ある程度菌量を減らすことになり、抗菌薬が効きやすくなったと推定している。除菌の補助になるという日本から初めてのデータとなる」と話している。